

Salut

サリュウ——「心の浄土」を教える
2005.SPRING

浄土の考えは、現代人に必要がないものなの
でしょうか、というTさんご質問に、私は
自信をもってこう答えましょう。浄土はいま
どこかへ行ってしまっているように見えます
が、それは依然として私たちの心の内奥で光
を放っています。それが現生人類である私た
ちの知的能力の本質をなしているからです。
この社会は利益のためには、それを必要とし
ていません。しかし、私たちが自分の心の本
質にたどり着こうとするときに、それはかな
らず私たちの心の内奥から出現を果たすにち
がないのです。浄土の思考とともにあらわ
れた私たち人類には、社会や経済のシステム
が必要としていなくとも、浄土を信じ、それ
を思うことが大切です。

中沢新

「浄土はどこへいった?」より抜粋

慶典院寺町倶楽部のニューズ・マガジン「サリュウ」通巻44号2005年春号

Salut



2005
SPRING



1958年生まれ。大阪経済大学教員(2005年3月に退職予定)。専門分野である社会政策・労働問題・家族／恋愛問題をジェンダーとシングル単位の視点から考察。近年は、教育学、社会学、文化人類学、心理学、宗教学を踏まえつつ、それらの総合科学としての、〈スピリチュアリティ〉を組み込んだ人権論・人生論の確立やスピリチュアルケア論に取り組む。主な著作は、『シングル化する日本』(洋泉社新書)、『スピリチュアル・シングル宣言』(明石書店)、『初めて学ぶジェンダー論』(大月書店)。第39回寺子屋トークのゲスト。

スピリチュアルなものが

響きあう

——目に見えないものと出会っていくということ

理性の外にあるものとの出会い

もともと正義感が強く、人権にも関心があり勉強もしていたので、ぼくは女性差別をしない人だと思いついていました。それが26歳の時、6年間つきあっていた彼女に振られて、自分の男的／カッパル単位的な思考がはじめて見えてきたんです。ノートに「一生あなたと別れませんと書いて署名してみたり、彼女は自分の分身、二人は

人のこころの奥深い面や、他人とつながっていく面を大切にしながら、個人として自立していきこうというのが、「スピリチュアル・シングル主義」。集団の規律が守られた「わかりやすい関係」のなかに私を閉じ込めないで、創造的な生き方をしようという提唱されている伊田広行さんにお話を伺いました。

伊田広行さん

生まるへも
問うことなから

生まれを問うことなから。
行いを問え。
火は実にあらゆる薪から生ずる。
賤しい家に生まれた人でも、
聖者として道心堅固であり、
恥を知って慎むならば
高貴の人となる。

「スッタニパータ〜ブッダのことば」

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ

Vol.44

Top Interview

スピリチュアルなものが響きあう
——目に見えないものとの出会い——

1

てらまち極楽ハトリールポ

下寺町発

まちづくりの行方に見えるもの

4

寄稿

死者とともにある街

——下寺町の空間誌——

10

Salut Gallery

應典院に集つアーティストたち

16

Special Talk

わたしたちがをつなぐアートの機能

——生きる技術としてのアートの可能性——

18

学びの拠点としての應典院

芸術による市民知の創造

24

秋田光彦士幹から

読んでこま

30

一体だと思ひ込んでいて、非常に「スキのない人であること、いい人であること」を重視する、ある種「先生」的な人だったことが冷静にわかるようになりました。男として好かれるため、強く勝ち続け、しつかりしないとイケないと思っていましたし、口で説得すれば、愛され、尊敬されると信じていました。

この失恋は今でも夢に出てくるほどのトラウマになりました。理性でコントロールできていたものが、揺さぶられてコントロールできなくなるとこの体験は理性を超える身体や感性部分の重要性を深く考えるきっかけを与えてくれました。合理的に物事を考えている自分の外側にも自分の全体があり、世界はそこにも拡がっているというのが見えてきたんです。だから小さい頃に受けた虐待の被害者がその苦しみを頭で乗り切ったとしても、後になってときどき恐怖感がでてくるのは、こういうことかもしれないと理解できます。そのような苦しみを想像できるのも、この失恋体験があるからです。

挫折といえは、いくつかの病気体験とか、受験の失敗とか、学会で評価されないとかもあるけど、それ以外に、ぼくは、92年の就職活動では履歴書を何通出しても落ちた

PO活動やボランティアなどで社会参加する学生はほんの一部。でもこれは大人の反映でもあります。大人にする、若者にしろ、「戦争や人権侵害はだめでしょ」と啓発するだけでは足りず、より根本から問題提起したいと思ひ、ぼくが用いたのが「スピリチュアル」という言葉です。今まで学生が接してきた親や先生の言う分かりやすいこと、学歴、テスト、入社試験の結果などではない、目に見えないスピリチュアルなものといった、わかりにくいものがあるよということが必要だと思ひます。そんなあいま



▲伊田広行さん17歳の頃

んですよ。自分は社会では必要とされていない、認められていないと落ち込みました。自分の力を試す場さえ与えられずに、社会から無視されたように感じて否定感が高まります。学生でも能力や人間性のよさとは無関係に就職活動で成功したり、いい人間でも合格しなかったり、理不尽なこともあります。まじめだけど、ちよつと暗くて、ぼつぼつとしか話せない学生は落ちやすいとか、そんな単純な世界です。落ちたとしても自分の個性だと思つて、またエンパワメントする道を見つけたらいいのではないのでしょうか。自分を肯定するためにどこかで働いたり、収入を得る体験も経て、これもできるんだと思つた上で納得した方が楽ですよね。例えばコンビニでのバイト、工場で働くなど、敢えてしんどいことをする時期があつてもいいんです。それも現実なんだから。もし就職活動がダメだとしても違う活動で自己肯定すればいい。

目に見えない大切なもの

学生と日常的に接して、今の若者が持っている心のかたさを変えることは難しいと感じています。自分からN

いなものも、存在するということを伝えて、いわば自分にとつてスピリチュアルとは何だろうかと一人一人が考え続けるための種をまいているのです。つながり、自分の本当にしたいことの気づきへの扉の入り口の命名としてスピリチュアルという呼び方をおいたのです。

社会全体はすぐには変わらないけど、この瞬間の関係は目指すようなスピリチュアルなものに変わらな思つています。NPOは効率だけを念頭に置くと、旧来の政党や企業と同じような組織体になり、現実主義という名のもとに、素朴な人の気持ちを後退させてしまっています。

だからあまりマネジメントや効率性を求めるのではなく、結果よりも、もつと手作り感や非合理性を大事にしてほしい。もちろん社会ではより具体的な政策を出すことも増えるので、プロフェッショナルな人がいてもいい。けれども「まず組織ありき」ではなくて、一人一人の思いを大事にした学び合ひ、時間をかけた関係や手作り感や効率だけではないものを増やしていくこと、そして他者への思いやり、想像、共感を大切にするスピリチュアルな感覚が今求められていると思ひます。

下寺町発

まちづくりの行方に見えるもの

てらまち極楽ストーリー・ルポ 編集部



昨年11月6日～23日の4回にわたり、上町台地からまちを考える会・主催、應典院寺町倶楽部・共催による「てらまち極楽ストーリー」が催された。應典院の位置する下寺町は、大阪市内でも有数の歴史と規模を誇る寺町。そこに込められた文化や芸術、また哲学を、新旧寺院の名建築を巡りながら、さまざまな「物語」に仮託して聴くという催しである。過去と現在、未来への射程を通して、この寺町から何が語られたのか、レポートする。

地域固有の価値を発見する

よく知られたことだが、上町台地は、大阪城や四天王寺をはじめ数々の歴史、生活資源に恵まれた魅力ある都心の文化空間である。由緒ある建造物や町並みは数多いが、中でも下寺町は千日前通りから逢坂まで、松屋町筋南北1.8キロの直線上に、24もの寺院が軒を連ね、特異な景観を現在に残している。東西の産線を結ぶ趣のある坂道(天王寺七坂)といつが、都市に蓄えられた時間を感じさせるのだろうか、最近のウォーキングブームを相まって、この一帯を訪れる散策者は、年々増加傾向にある。

しかし実際に散策者の目に真つ先に飛び込んでくるのは、この町を囲むように林立する高層マンション群である。パブル期以来の建築ブッシュとかで、勢い新しい移住者は増えているが、だからといってすべさま「文化・歴史あふれる」都市生活が保証されるわけではない。むしろ、元々の地元住民と新しい住民の間にある見えない壁を、どう取り払うのか、観光資源とは質の違う価値が求められているといっている。

このたびの連続セミナー「てらまち極楽ストーリー」は、下寺町の寺院を舞台に、当地の住民である僧侶がその歴史や祭礼、芸術といった寺町の魅力を今昔の両面から取り上げ、社会に伝え直そうと企画された。一見「知る」と「発見」の

ような趣向だが、じつは地域固有の価値を再発見することで、そこに暮らす人々がまちに対し、どのような新たな愛着や信頼を育むことができるのか、言い換えれば予め定義された「コミュニティ」ではなく、より創造的な「コミュニティ」へのイメージの提出を試みようとしたのである。

主催の上町台地からまちを考える会は、一昨年発会したまちづくりNPOで、應典院とは発会以来つきあいの深い団体だ(代表理事を應典院の秋田が務めている)。いわば外の目からとらえて寺町の魅力を引き出そうとする関係も興味深い。

まずは、下寺町を知る、学ぶことから始めてみることにした。

寺町を語る「人材」の存在感

「てらまち極楽ストーリー」は4つの物語で構成されている。

第1話は(11月6日)寺町・いにしえ編「極楽ものしり学入門」と題して、寺町の最長老心光寺住職、山名雄光さんに話を聞いた。本堂に安置されている大阪市指定重要文化財の十一面観音の紹介をはじめ、熊野詣の参詣道としての上町台地、天王寺七坂、文人墨客や物語の足跡とそこに生まれた料亭の数々まで、寺町の最長老(大正2年生まれ)が歴史の



「先代は、法務以外の時間はすっと本堂の屋根に上って大工仕事でしたわ」と山名さんはなつかしげに語る。戦前には道を挟んで寺の向かい側に、設計を教える学校があったなんて、知られざる秘話も聞へ。

第2話(11月12日)は寺町・現代編「極案のまちづくり」で題し、一心寺長きであり、建築家でもある高口恭行さんが、主に下寺町のまちづくりプランについて語った。

よく知られているが高口さんは関西の建築界の重鎮である(寺町の建築物の設計で、2003年の関西建築家大賞を)

「シヨンなどが実演された。

この寺町・アート編「極案・声と音のアート」は、セミナーというより、仏教パフォーマンスと呼ぶにふさわしい。浄土宗の代表的な法要、多彩な楽器や法衣の紹介、浄土宗特有の声と念仏のバリエーション、最後は、参加者と僧侶がいっしょに木魚を打ったり、礼拝の五体投地も体験した。日本的な伝統美といっていると思うが、それを教条的に行わないで、シヨンの短い時間でつないだ構成も巧みだった(写真op.1)。

それにしても、本堂を埋めた80名の大半が若者たちであったことに驚いた。どの顔も新しい文化に出会う喜びにあふれている。詩人の上田假奈代さんと僧侶のコーボレーションでも感じたことだが、ここでは宗教と芸術が同じ表情の中に共存していた。若者たちにとって、これは一種の異文化体験なのかもしれない。

大覚寺の参道では、竹筒の燈籠がいくつも配置され、夕闇を照らし出した。閉会后には、三帰会の僧侶の面々が、参加者一人ひとりにお供物のみかん(お下がりというらしい)を手渡していた。お寺と若者の距離が、一気に近づいたようだった。

最終回は、前3話とは少し趣向が違った。寺町の当事者である僧侶ではなく、外から見つめた時、寺町には、どんな潜在力があるのか、それを市民が掘り起こす初めての企画だった。

受賞)。プロの建築家がまちづくりの視点から下寺町を見るとどうなるか、僧侶との二面性が浮き立って刺激的な話となった(写真op.2)。

一心寺は、古く中世の時代、沈む夕陽を見て極楽浄土に思いをさせるという修法「日想観」の聖地であった。夕陽丘という美しい界隈の地名とも関連が深い。それを、現代の名所としてどう表現するのか、高口さんの本領は建築以外のところで存分に発揮される。

「道頓堀も大阪ドームもUSJも似た風景は世界中どこにでもある。この寺町こそ、大阪を代表するアイデンティティ空間」と高口さんは言う。下寺町を中核とした壮大な都市計画プランである「茶臼山・夕陽丘プロムナード構想」の提言、またまちのにぎわいの源泉としての「一心寺シアター」倶楽(劇場)の建設や、なにわ人形芝居フェスティバルの開催など、文字通り寺町のプロデューサーの異彩かりに圧倒された。

仏教の「異文化体験」、若者が共感

第3話(11月19日)の会場は、江戸時代に創建された大覚寺。恐らくは市内の古建築として有数のものであるろう本堂は、全体が黒光りして荘厳な空気が漂う。そこを舞台上に下寺町の若手僧侶(三帰会という)による、声明や読経、コーボ

第4話(11月23日)「極案タウン」わたしたちの寺町について語ろう(第42回寺子屋トーク)では、應徳院を会場に、下寺町の資源力が持つ価値、役割について話し合った。第一部は歴史地理学を専門とする流通科学大学助教授の加藤政洋さんの「死者とともにある街々下寺町の空間誌」と題した講演(別項に寄稿)。第二部はトークセッション「わたしたちの寺町について語ろう」と題し、上町台地からまちを考える会の理事瀧美公秀さん(大阪大学大学院助教授)、宋悟さん(「リアNGOセンター代表理事」)に秋田主幹が加わり、コメンテーターとして高田光雄さん(京都大学大学院教授)、コーディネーターに上町台地からまちを考える会事務局長の山口洋曲さんを招いた(写真op.1)。

伝統や文化は、誰が決めるのか

そこでのセッションもなかなか興味深い内容だったのだが、こ





では各発言の要旨を簡単にまとめておこう。

まず秋田は寺町で生きたる僧侶として、周辺を散策する人々は増えても本当の出会いの機会がなく、地域と寺院の関係は乏しいという寺町の問題点を指摘した。今後、日本は未曾有の多死社会を迎える。この地域全体が引き受けていかねばならない課題に対し、また人々

とは聞いてくれる人がいるからこそ、とどまるものであるのなら、他者に思いをはせる行為こそが重要だと指摘した。下寺町は被災地ではないが、都心の喧騒の中にあつて、そのように他者に思いをはせたくなる町である、とその印象を述べた。

また、宋さんは、在日コリアンとしての立場から、歴史・伝統・文化というキーワードには複雑なまなざしを投げかけた」と語った。新しい文化は既存の伝統秩序が破壊され、再構築されるプロセスから生まれる。現在の自分との関係を取り結ばない歴史や伝統には、興味が生まれにくい、そもそも伝統、文化というものは誰が決めるのか、と鋭い問題提起を発した。事態を前に進めていくためには、新しい風を外から入れる必要があり、異質な人たちとの交流が大切だと語った。

の心をめぐる深刻な課題を解決するためにも、寺院に求められる役割は何かと問い直すべきだと語った。歴史や伝統を守ることは重要なのではなく、そこから人間の普遍性を取り出し、今日の問題に照射しながら、市民中心のまちづくりを考へることが重要だと述べた。

渥美さんは、災害被災地支援活動の経験から、他者の悲しみに寄り添うことの重要性を語った。破壊された町は復興できても、被災者の喪失感は、たとえそこで他者の声に耳を傾け、語り継ぐなかでしか回復できないのかもしれない。記憶

最後に山口さんは、なぜ下寺町なのかを投げかけた。一般にまちづくりやNPOの活動は、問題の緊急度・重要度の高い領域から着手される傾向にある。その方が社会的なアピールも有効だし、共感も得やすい。しかし、日常では緊急度が低いと思われるような課題にも目をむけ、そこから常識化している現実を疑う、見直すことが重要ではないか。地域はそこに暮らす人々だけのものではない。いま私たちの寺町」を語ることでできるかどうかが、これからの日本の地域の存在の是非を問う岐路になるのかもしれないと語った。

矛盾の蓄積に気づく

1話から3話までは、下寺町の現在にふれながら、今の寺に残るさまざまな伝統とともに現在の下寺町で起る新しい試みを学んだ。寺町に潜在していた資源力の一部を引き出したと言っているかもしれない。また、第4話では、活動の分野の異なる専門家がそれぞれの「寺町」観を交換しながら、活発な議論が広がった。仏教と関係のない人たちが寺町について語り合うことの、ほとんどの最初の出来事だ。

4回を通じて、アンケートや直に接した参加者から多数寄せられたのは、「お寺の魅力をもっと知りたい」という声だった。お寺に触れたいという潜在的なニーズに対して、寺院からも「若者の関心の高さに驚いた」と、感想が聞かれた。ようやく片思い同士がこの企画を通じて、お互いの思いを確認したということだろうか。だからお寺がたた門戸を開放すればいいということではなく、両者との間を上手につなぎ、交流させていくような仕組みづくりが肝要だろう。

これから迎える超高齢化社会では、効率や機能優先を改め、ゆとりや和み、安心を第一としてQOL(生活や人生の価値)こそ求められる。それには今までのスクラップ&ビルド型の都市開発ではなく、地域固有の価値を再発見しながら、ていねいな関係を創り上げていく人間中心の開発が求めらる。」「ていねいな関係を創り上げていく人間中心の開発が求めらる。」と、寺町を題材とし

ながら、いつは日本の地域の多くが抱える課題をあぶりだそうと語っている。

じつにまちづくりは矛盾の連続である。そこには正解と効率率といった、これまでの都市開発の定石は通用しない。だからこそ、まちづくりの行方には、私たち人間が生きる上で共通のミッションが見えてくるのである。

セッションで京都大学教授の高田光雄さんがまとめたコメントが印象的だ。

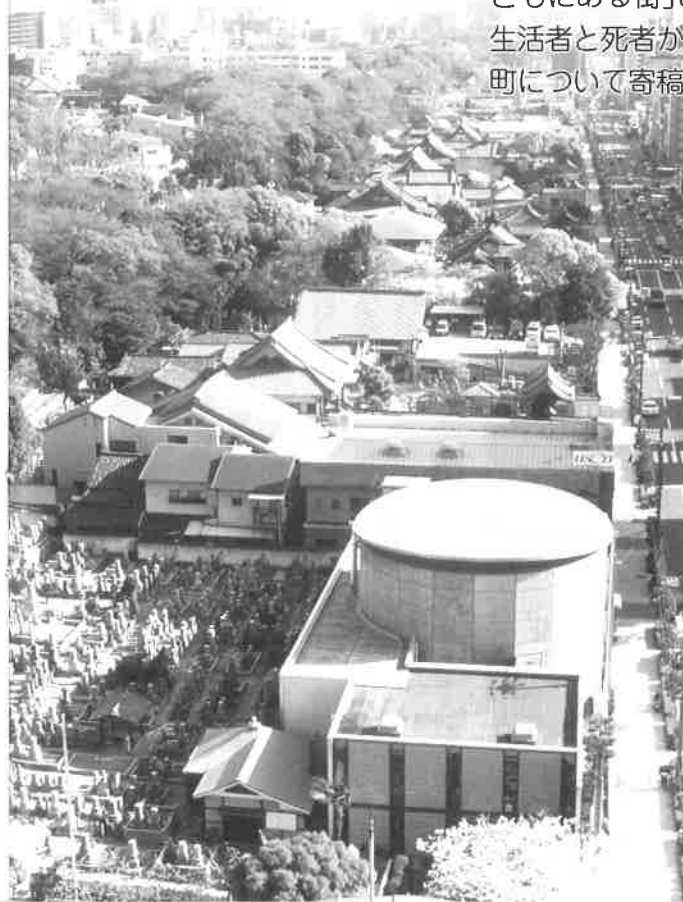
「まちの問題とは、異なる価値観の対立を乗り越えることであるのだが、まちづくりの多くが利害調整で挫折する。そして、実は、歴史や文化こそ矛盾の塊であり、矛盾の蓄積に気づくことこそ、まちづくりの現場で歴史文化に向き合う大きな意味だ」

誰も書き換えることができない、という意味で、寺町は古典ではない。現代の寺町は寺院と市民が手を取り合って創造していくかねばならない。



彼岸と此岸の境位だからであろうか。墓地はあきらかに日常生活の空間とは異なる性格を有する場所であるものの、そこには人を惹きつけてやまない魅力がある。ノーベル文学賞作家のエリアス・カネッティは、「きわめて強烈な墓地の魅力」を語る短いエッセーのなかで、「そこを訪れる者たちに『独特な気分状態』を引き起こさせる場所性の強度に着目し、それを『墓地の情緒』と名づけた。」「墓地は、忘れられない人と忘れられた人を抱いて、時を重ねている」(『朝日新聞』2004年11月10日「天声人語」)。有名・無名の者たち、家族や祖先のようにつながりのある者、そしてつながりのない者、それらが皆、死者として共在し眠る場であるという点で、そこは記憶の場でもある。「人びとがたとえ身内の者が埋葬されていない墓地でも、そこを訪れる(カネッティのは、おそらく死者たちの記憶をわたしたちが共有することができるからではなく、それを引き受け分有することができるからではないだろうか。さらに、有名・無名、つながりの有無にかかわらず死者たちがともに眠るという点で、墓地はおのずと、つねに／すでに他のもの

墓地のある風景



死者とともにある街 ～下寺町の空間誌～

流通科学大学助教授 加藤 政洋

寺院が集積する下寺町は、墓地が集積する特異な地域でもある。てらまち極楽ストーリーの第4話のゲスト加藤政洋さんは、この街を「死者とともにある街」と名づけた。今を生きる生活者と死者が共存する異界の街・下寺町について寄稿していただいた。

もろの場所(そこに生きる人びと)との連関のうちにおかれることになる。無論、西洋の文化とは違ってもあるだろうが、他所とのつながりを前提とする(寺・町)・墓地の空間的なあり方には共通する面があるように思われるのである。

下寺町の空間誌——素描——

このように見てくると、下寺町は死者とともにある町として、近代都市大阪のなかでとても興味ぶかい空間として浮かび上がってくる。いうまでもなく、近世都市の大阪にあつては市街地の周縁部に位置していただけでなく、近松の物語、あるいはその他の巡拝風俗に示されるように、意味論的な周縁性も有していた(周縁は文化ないしは counter-culture の生まれる場所でもある)。

しかし、近代化に伴う都市の拡大(市街地化の波はあつと)に間にこの町を乗り越え、郊外へ郊外へと延伸していった。その過程で旧市街地周辺部の大小の墓地が整理統合された一方、寺町はその役割をひきつづき託され、空間的には都市の中心に位置するところとなったのである。その時、この街のあらたな魅力を発見した人物たちが

移動の時代のプラットフォーム

ここで話の筋をいくぶん迂回させることになるが、近代ないしポスト近代における(都市)社会の大きな特徴のひとつは、これまで以上に移動性が高まっていることである。通学、通勤をはじめとする日々の移動、ライフステージに合わせた居住地の移動、あるいはそれこそ世界をまたにかけて移動することなど、場合によっては自分の意思ではなく移動それ自体を強制されることもあるが、いずれにせよ、高速交通機関の発達は、わたしたちの身体を速度のなかに配置したのだった。「旅を栖に」といったのは芭蕉であるが、わたしたちも多かれ少なかれ旅のなかに住まう(living in travel)なのだと言えよう。

移動を前提とする社会の場合、安定した場所のあり方はきわめて難しくなる。もう少し言葉足せば、ある程度の期間にわたる定住を前提としてきた「コミュニティ」のあり方が変質を迫られる、あるいは同質性を所与とするような「コミュニティ」という考え方それ自体の変更に迫られることになるのだ。ここで想定されるのは、時には思いも



よらぬ、また時には一時的な他者と共存する「コミュニティ」にほかならない。同質性から異他性へ。これを、社会学者の若林幹夫にならって「共同体」から「異体+共移体」への移行と位置づけることもできるだろう。すでに異なり、つねに移りゆく「コミュニティ」である。すると、この「コミュニティ」の場は、やや隠喩的になるがプラットフォームにも見立てられるように思う。それは、一日、一週間、一年、あるいはライフステージの各段階、そして生涯という各自の経路の一時的な停留点だからである。出口を異にする者たちが——人生という旅のな



いた。それは、作家の宇野浩二が大阪を「木のない都」と呼んだのに反して、上町台地の屋敷に立つた緑ゆたかな空間を見いだした都会の漫歩者・北尾録之助と、その視点を引き継いでこの界隈を「木の都」と呼んだ作家の織田作之助である。

下寺町は産線の下に位置している。知られるように、この街を縫うようにして産線の上と下を結び由緒ある坂がいくつもある。坂のある風景を作中にも織田作であった。興味ぶかいことに、手付かずとはいわずとも路地的なたずまいをそのままに残し、寺院が建ち並び寺町の風景に彼は江戸の雰囲気を感じ取っていた。織田作はそれを大阪の伝統とも言うている。変貌著しいモダン大阪の都市空間において、彼が江戸という時代を唯一幻視できたのが、こ

の街であったといふべきだろうか。

しかし、都市の変容は下寺町を新たな位相へと移し変えた。かつてフランスの哲学者アンリ・ルフェーブルは街路の役割を「切断——縫合」と定義していた。つまり、街路は此処と他処を結びつける媒体であると同時に、それが巨大な構築物としてわたしたちの前に起ち現われるとき、街路は此処と他処を切り離す役割をも果たすのである。松屋町筋、千日前通などはまさしく切断の役割を果たし、そうした街路に囲繞された結果、周辺の街区とは地理的に連続しているというよりも、むしろ景観の上での断絶が顕著になっている。とはいえ南北に連なる寺を眺めれば、逆説的ではあるがこうした事態がまさしく下寺町の場所性の強度を浮き彫りにすると同時に、その価値をいっそう高めているとも言えよう。

このような地理歴史的なスケッチをふまえ、今度は逆に下寺町のあり方を未来へと折り返してみたい。歴史性と場所性、そして死者とともにある街という特異性を参照点として。



か——住まう場所。転入もあれば転出もある。共に異なり、共に移り行く。しかし、一時的であれ同じ場所に共に在るという点で、コミュニティは各人の生涯経路の社会的な結節点ともなるのである。その際に、必要なのは開かれた場所感覚の必要性である。ここで

いう場所感覚とは、今いる場所への愛着だったり、根ざしの感覚にもよる場所理解の総体であるのだが、居住にまつわる場合には共同体の同質性を求めるがゆえに、とかく閉鎖的な場所感覚に陥りやすくなってしまう。そこででは他者に対する寛容さが失われがちだ。異他なるものは同質化されるか、排除されるべき対象になってしまつのである。しかしながら、すでに見たとおり「コミュニティがプラットフォームと化しつつあることを考

えると、必要なのは共同ではなく協働ということになるのではないか。これからは何でもあり、などと言っているのではない。節度ある寛容さを持ちつつ、開かれた場所／「コミュニティのあり方を模索する方途が今求められていると感じているのである。」

ヘテロトピアとしての下寺町
— 社会を構想する街へ —

すいぶんと遠回りをしてしまったが、このように考えるとき、寺町のあり方それ自体がひとつのヒントをわたしたちにあたえてくれるように思われる。というのも、寺町は死者とともにある街、その無数の他者たちの痕跡が埋め尽くされた場であるからだ。寺町ないし墓地の「情緒」とは、そこからももし出されているのかも知れない。とはいえず、死者とは他者である。わたしたちとの「コミュニケーション」を担保するものなど何もない。また彼岸に在る彼・彼女らと記憶を共有することは難しい。しかしながら、わたしたちは自ら語りかけ、耳を傾け、その記憶を自分なりに引き取り分有することを通じて、「死者とさえも」コミュニケーションできる

(内田樹)のではないだろうか。死者＝他者と同一の立ち位置に立つことはもちろん不可能であるが、わたしたちには語りかけ、寄り添うことはできる。そうした、彼岸と此岸の境界に位置する実在の場こそ寺町である。

ここで思い出されるのは、やはりフランスの哲学者であるミシェル・フーコーが、かつて一度だけ唱えた「ヘテロトピア」という考え方である。それはユートピア(実在しない場所＝理想郷)とは違い、必ずやどの時代、どの社会にも実在する場所である。しかしながら、奇妙にもこの場所はわたしたちの慣れ親しんだ空間とはおよそ縁がなく、まるで社会を逆倒(さかさま)にして映し出すような鏡の役割を果たしている。鏡に映るつまり鏡のなかの自分は虚像である。しかし、この虚像は自己にまなざしを投げ返すことを通じて、今いる場所を、そしてわたしたちが自分の背後に広がる、自分を取り囲む空間と社会のなかにいることを認識させてくれる。フーコーは虚像が実像の社会性をあらわにするという奇妙な性質を有する鏡を、まさに「ヘテロトピア」として捉えていた。

他者としての死者たちの無数の痕跡を想像し、寄り添うとき(墓地の情緒「にひたるとき」)、寺町

はわたしたちの生きる都市の社会・空間もまた他者たちの無数の線が横断し交錯する場であることであらわにする。社会のありようを照射する。そして共在しながら、同一の社会的な立場、あるいは同一の空間的な位置にも立てない以上、寄り添うことを通じて相異なりながら共在することを教えてくれるのが寺町ではないだろうか。この点で、寺町をヘテロトピアと呼ぶこともあながち間違っているのではない。

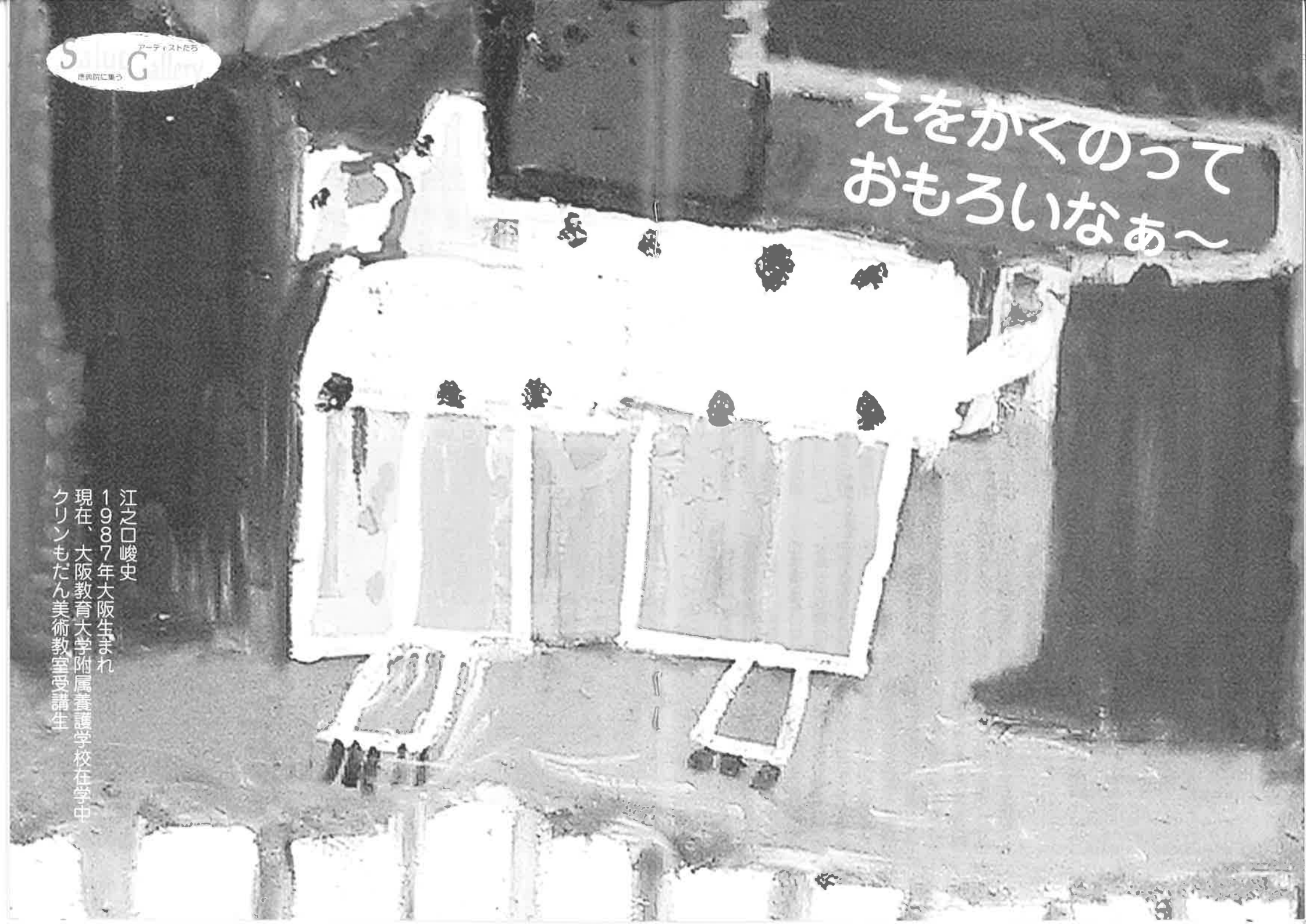
これまでわたしたちは、たゞは街は街とひとことた際に、社会が街をフランするの事を考へてきた。けれどもヘテロトピアとしての寺町から、わたしは「社会を想像／創造する街」のあり方を構想できるように思えるのである。



加藤政洋さん
流通科学大学商学部ファイナンス学科助教授。1972年信州生まれ。大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程修了。専門分野は歴史地理学。著書は、『大阪のスラムと盛り場—近代都市と場所の系譜学』(創元社)他。翻訳は、D. マッシー著『権力の幾何学と進歩的な場所感覚』(岩波書店)他。

えをかくのって
おもろいなあ～

江之口峻史
1987年大阪生まれ
現在、大阪教育大学附属養護学校在学中
クリンもたん美術教室受講生



——中西さんはプロジェクト、大澤さんは美術教室の運営と状況は異なりますが、子どもを対象にした活動を展開されていますね。
 中西●私たちは普段は赤レンガ倉庫を拠点にしているのですが、それ以外の場でもぜひ活動する場を作りたいと感じていました。そこで、ちょうど大阪市立大学の中西真教授を紹介して、大学附属病院でのアートプロジェクトの取り組みを知り、こちらのプロジェクトを病院側に提案したことがきっかけです。小児病棟の入院患者は赤ちゃんから高校生までいろいろで、プロジェクトを通して私は単純に子どもに振り回されたことがうれしかったです(写真10)。

アートを媒体にした親子の関係

大澤●そう。子どもが、がんばる姿を見て親が喜び、親が喜ぶ姿を見て、子どもがまたがんばるといふ好循環があるんです。また、ここで同じ立場の親同士が集まり、悩み相談や情報交換するというよい関係もできあがっています。最初、親の姿が見えないと不安だった(写真11)。知的障害を持つ子どもが多いので普段、展覧会で自分の絵をいろんな人に見てもらうことをとても喜ぶんです。個展を開いた生徒もいます。するとほかの保護者から「うちの子ども」と、どんなやる気になって。親がやる気になれば、子どももやる気が出てきます。子どもたちは、一番近くにいる家族に認めて欲しいのです。



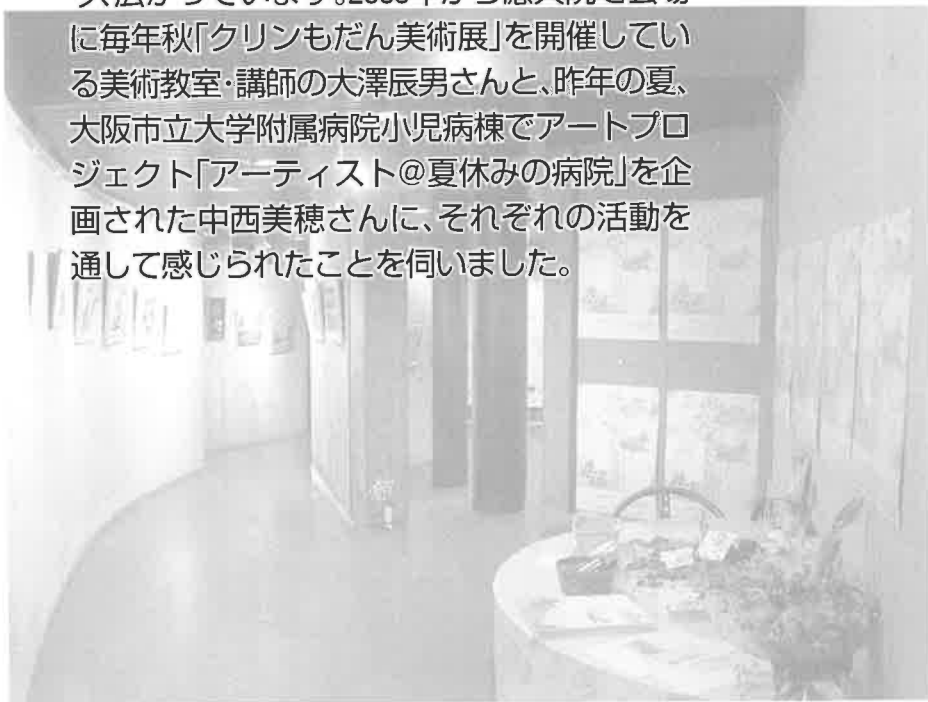
▲プレイルームの壁に大きな紙を貼って水彩画を描いているところ。入院患者も保護者も毎日それを見ながら過ごす。

大澤●通っているうちに分かりました。子が絵に集中するうちに少しずつ自立するという変化も見られます。

Special Talk
 わたしと社会をつなぐアートの効能
 ——生きる技術としてのアートの可能性

ゲスト：大澤辰男さん
 中西美穂さん

アートを見る、作る、という個人的な行為としてとらえるだけではなく、アートの持つさまざまな効能に着目したプロジェクトや活動が今、広がっています。2000年から應典院を会場に毎年秋「クリンもだん美術展」を開催している美術教室・講師の大澤辰男さんと、昨年の夏、大阪市立大学附属病院小児病棟でアートプロジェクト「アーティスト@夏休みの病院」を企画された中西美穂さんに、それぞれの活動を通して感じられたことを伺いました。





中西美穂さん

美術家。大阪市港区にある築港赤レンガ倉庫を拠点に、都市の芸術環境を整えることを目的としたアートプロジェクト、「NPO法人大阪アーツポリア」代表理事。

る機会をアーティスト自身が持ったほうが絶対いい。病院の魅力は不特定多数の人が通い、見るつもりのない人でも見ってしまうという点です。そういう日常に投げ出されるとプロジェクトは呼吸を始めるので、最初のプランと作品がずいぶん変わってきます。そこが、とてもおもしろい。

大澤●そう、ライブ感がある。

中西●セッションみたいな感じですよ。今回の展示は病院の待合室だったんですが、制作に入る前に作家は半日ほどそこに座って、



大澤辰男さん

美術家。障害を持つ人も持たない人もともに自分の絵を描くということ大切にしている「クリンもだん美術教室」(聖公会生野センター主催)の講師。

とはわかりませんが、むしろ親が子どもと離れづらいのかもしれない。選んで通う美術教室と選べない病院で状況は異なりますが、絵に集中できるという瞬間は同じです。そこへ医療関係者ではなく、アーティストという「よくわからない人」が行くことで許される面がありました。親子という既存の関係ではなく、アーティストが入ることで、アートと私、アートとあなたという関係が生まれる。そこから違う視点で画者を捉えられたのではないかと思えます。そのこと

でちょっとだけ病室の空気が動いたように感じました。

大澤●親子の関係が制作者と鑑賞者に変化するんですよ。それがおもしろい。「コミュニケーション」の手段が増える。だから最初は画材も100円ショップのものだったのが、親から「ちょっと先生、絵の具買ってきただって」と言われるようになったり(笑)。展覧会を開催して外からの評判を聞くと、親の方もいいものを作らせたいという気持ちになってくるようですよ。

中西●親の意識の変化ですね。子どもをコントロールしないといけないという立場から、もっと対等になる感じでしょうか。

場所とのセッション

中西●今回の病院もそのひとつだったんですが、私はとても「場所」

に関心があります。ある「場所」にアートと呼ばれるものが入ったときに、そこがどのように変化していくのかということに興味がありました。

大澤●「場所」といえば、知的障害の子の作品展を引き受けてくれる場が少ない。画廊はプロを扱うという意識がありますからできません。こちらの思いをくみとり、協力もしてくれる場でないといけないですよ。額もしつかりして、かっこいいシチュエーションで見てもらいたい。でもギャラリーなど美術専門の空間はここに置けばアートになるという予定調和なんです。美術の非専門の場でアートを成立させるためには、やはり展示力が必要ですよ。

中西●ホワイトキューブで見せるのもひとつのアーティストの方法論ですが、それがすべてではないですよ。いろんな場所で展示すると思います。自分はこれが好き、得意なんだと、発見できるよって。

中西●その子の選択肢を広げること、技術を広げること、ことごとくでしようか。

大澤●ほくは、子どもたちに絵を教えながら「自分で選ぶ」ということを教えています。ほくたちは気にいった音楽があれば、「CD買っていく」となるけれど、障害をもった生徒は探すことができない。選択できない状況を生きざるを得ない。学校選びもそう。進路も、養護学校卒業後は授産施設か、作業所に行くだけで、その次の高等教育の選択ができない。限られた状況のなかで生きていて、自分で「選ぶ」概念すらない子がいます。

アートで自立するということ

——今のお二人の立場から子ども時代に与えられる芸術教育や学

イメージを膨らませていました。ホワイトキューブではない場所はどうか予測不可能なので、どんどんおもしろくなっていく、やりがいがあります。

大澤●病院プロジェクト、やらせてほしいなあ(笑)。というのも、知的障害を持つ子や低学年の子どもに教えることは感触が近いと思うので、確かめてみたいというのがある。知的障害の子に絵を教える際、重要なのがコントロールしながらコントロールをいかにはずしていくかということです。このバランスが難しい。知的障害の子は従順なので言う通りにする。コツコツと描くのが得意な子であれば「油絵やってみたら」と画材を変える提案をすることがコントロールなんです。その画材に慣れるとそれだけになるんですよ。画材を変え、もとに戻す、というプロセスのなかで選択するようにしても

〔クリンもだん美術教室〕

聖公会生野センター主催の美術教室。

1993年から始まった絵画教室は一人の障害者をもつ受講生の参加を契機に多くの障害者が学ぶ場となった。現在8歳から27歳まで14名の知的障害者と健常者の受講者を抱え、講師の大澤辰男、8人のボランティアスタッフによって運営されている。

應典院を会場にした絵画教室の絵画展は2000年から毎年11月に開催。単に描くだけでなく、展覧会開催を通じ、社会と接点をつくることを活動の主眼としている。会場の展示は毎年、受講者の技術向上とともに、拡大し魅力を増している。

展覧会とともに昨年よりシンポジウムを開催し、保護者、美術評論家、美術ライター、大学教授など多彩なゲストを招き、障害者がアートを通して社会とつながる回路を積極的に模索している。2004年度は「絵が紡ぐ親と子の幸せな関係」と題し、困難をとまぬ障害児とのコミュニケーションについて、親と子に視点を置いて語り合う場を作った。

〔アーティスト@夏休みの病院〕

2004年夏休み、大阪市立大学医学部附属病院小児病棟を会場に「NPO法人大阪アーツボリア」が主催し、大阪市立大学医学部附属病院、同大学医学研究科小児科学教室が共催した。同病院小児病棟の「療養環境プロジェクト」の一環である「アートプロジェクト」のプログラムの一つ。その目的は「若手表現者が主体的に社会に関わる場づくり」「個性が尊重される明るい未来像を各々の専門領域の視点で願う美術関係者と医療関係者の意見や価値観交換の場づくり」「成長過程にある患児に生の芸術鑑賞の機会の提案」「継続的に行う運営基盤のためのスタッフ育成」である。

アーティスト・松本尚が持参した『ここにいるのは誰』という話のある紙版に、子どもたちが自由に描きこみ、最終的には話のつながる1冊の本を作成した。その子どもたちの作品の一部と子どもたちに触発されて制作した松本の大作を通院する人も見られる待合室に展示。プロジェクト終了後はフォーラム「病院+アート=!?」を應典院にて開催。「病院とアート」に関わる様々な立場の演者のコラボレーション、および会場参加者も交えた自由な討論・情報交換の場を作った。

とらえ方が新鮮でした。技術者集団である病院にアートセンターをつくってみてもおもしろそう、と思っています。

大澤●僕は、絵画教室のこれまでの活動を社会に伝えるための出版を考えています。またマネジメントのできるNPOも作りたい。その次の段階は、社会との接点を具

体的にどうつくりますかです。保護者は、養護学校を卒業した後で、子どもに内職仕事をするような作業所にずっと行かせたくないと言います。もし絵が得意で好きならその道で生きていける方法を考えていとい。絵で食べて生きていくというのは難しい。けれど得意なもので社会に参加できることが、子

どもや親のプライドを取り戻すことになるかもしれない。だから、継続的な教育の場が必要です。養護学校を卒業した子の教育の場がないので、絵画教室をゆくゆくは学校のような高等教育が受けられる場にしりたいと思っています。

——今日はありがとうございました。



▲クリンもだん美術展 in 應典院

校における美術教育についてどんな風に見ていますか？

大澤●正直、今の美術教育についてはあまりよくわかりませんが、僕は作品作りに必要な想像力は、ある程度訓練で養えると思っています。

中西●私も、想像力は訓練で得られるある種の「技術」で、その「技術」を学ぶのに美術は有効だと考えています。この想像力は作品制作をするためだけではなく、現代人に必要な「生きるための技術」ですよ。例えば、相手の思いやるためであったり、他の可能性をさがしてみることであったり。でも想像力の持ち方というのもいろいろあり、自分を守る武器にもなりますが、相手を傷つける道具にもなる。メディアアリティシーは、「その扱いに気をつけろ」ということでしょうか。想像力と同じなのではないでしょうか。

大澤●そうですね。このような作品を提示したら、受け手はどうとるだろうと考えながら、ものづくりはできると思うんですね。作品作りには、構想力も必要です。特に油絵には、構想力と全体像を把握する力が必要で、塗り重ねていくという作業で作っていくわけ

です。そのときに大体の完成図を描いておかないといいものが作れません。生徒たちは訓練しながら想像力を養っていくわけなんです。

——そういう意味では、「コミュニケーション」も想像力の賜物かもしれないですね。最後に今後の活動についてお聞かせください。

中西●今回のプロジェクトは一区切りであり、一つの始まりでもあります。来年の夏休みも病院に行きたいと伝えていて、助成金の申請もしました。ただ私たちが必ず行くということが重要ではなくて、ほかのアーティスト、アート関係者ではないけれどもそういった場に行きたいという人の受け皿が作れたらと。保育士さんとか介護士さんの参加があればおもしろい。病院は、自分の技術で食べている人たちの集団です。「アートとは何か」という話ではなくて、「その技術を使ってどう関わるか」という

芸術による市民知の創造

秋田光彦（應典院主幹）

▼應典院で若者たちの交流



市民社会とは高度な学習社会ともいわれている。これまでの学校教育のような制度の上に成り立ったものではなく、主体的な個人が自発的に創り上げる「学び」の共同体が大きな特徴だ。

同時に、「学び」はますます多様なものとなっていく。一部の専門家だけでなく、誰もが教え手であり、また学び手となり得るし、都市のあらゆる場所が「学び」の場と化してゆく。その担い手が、NPOであり、若いアーティストだろう。

應典院の活動を紹介しながら、「市民と学び」のエンパワーについて考察する。

■市民社会と学び

多様な価値社会において、誰が教育の主体なのか、いま大きな転換期を迎えている。

右肩上がりの成長の時代、教育といえば学校がシンボルであり、東大を頂点とする人材供給システムが全国津々浦々まで整備されてきた。しかし、90年代、慢性的な低成長時代を迎え、失業率の増大や雇用不安など、これまでの日本の安定基盤が壊れ、それとともにこれを下支えしてきた学校神話も崩壊した。95年の阪神淡路大震災を契機に、日本は本格的な市民社会に入ったといわれるが、同時にこれを分岐点としながら教育の軸足は集団的人材育成システムから個人の自己実現、社会参加にシフトした。自立した主体的個人を市民と呼ぶが、「教育」に代わって「学び」という言葉が浮上するのも、この市民社会の到来と無縁ではない。

これまでの教育システム、とりわけ成

人を対象とした教育環境は、市民の「学び」の観点からはけつして恵まれたものではなかった。行政サービスとしての社会教育も、平等原則に縛られて、思い切った人材育成に結びつかない。最近でこそ大学が社会人対象に門戸を開き始めたが、市民の「学び」は、教育システムの主流からは長く見過ごされてきたのである。

それを大きく転換したのが、80年代後半以降、新たな社会問題へのアプローチとして、「市民知」の創造が世界中で問われたことだろう。人権や環境、国際理解、多文化共生など、明快な解決策が見当たらない複雑な問題だからこそ、これまでの権威依存ではない、当事者たちによる「学び」が広く求められたのである。以後ワークショップ、参加型学習といわれる新たな「学び」のスタイルも生まれ、学び手である市民自らが「学び」の場を創造するインタラクティブな活動が普及していく。市民とは、上から知識をいただくような受身的な存在ではない。問題の現場に参加して、さま

ざまな協働を通して、いっしょに経験や知恵を出し学びあう。市民自らが学び、体得した「市民知」は、以後さまざまな局面で社会変革を促し、NPOやNGOといった自律的な学習組織を生むことになる。

多様な個性を持つNPOだが、どんな領域の活動であれ、そのミッションを、また現状を広く社会に伝えるために、開発的な市民教育を行なうことは必然といえる。地域に根ざした活動であればなおさら、「市民知」からとらえたまちの問題が大きくクローズアップされることになる。

上から下への関係ではなく、水平的で相互的な「学び」は、日本の教育の構造を根本から変えた。またそれは、自分たちの暮らす地域を、「市民知」から見つめなおす大きな転機ともなったのだ。

■まほひの会と社会

2000年代に入り、都市と地域の

乖離はさらに著しい様相を呈している。最近、都心に次々とテーマパークのような巨大開発が登場しているが、壁のようにそそり立つそれらの空間は、周囲のまちと断絶され、いっそうの自閉化を深めている。地域との共生を置き去りにした、「都市再生」のイメージが全国各地に拡大再生産されてゆく。

都心の居住地区もまた、それと無関係ではない。應典院の位置する上町台地は、大阪屈指の文教地区だが、ここ数年、異常なマンションの建設ラッシュが続いている。都心回帰などともてはやされているが、どのマンションも玄関からオートロックの完全密閉の空間であり、最初から周囲のまちや景観とかわりあうことを拒否しているかのようである。合理化とは機能と効率を一元化することで高められるが、それはまちの視点から言えば、新たな出会いも参加もない、他者に対し極めて無関心なコミュニティを作り上げることと同義なのである。

むしろ、その危機的な変貌ぶりにまちの住民たちが無関心であるわけではないが、都心の空洞化を前に、現状を認めざるを得ないのが実情だろう。既存の住民組織が全部そうだということも、あるいは「学び」を失うと、まちは現状への批判力を失っていく。

一方で、新しい「学び」によるまちづくりも始まっている。同じく上町台地の一角に、空堀地区という、戦前から残る長屋街があるが、ここでは地元の住民と新しい住民のNPOがいっしょになって、ユニークなまちづくりが進んでいる。解体寸前の長屋をNPOの面々が借り受け、新しい住まい手に対する提案や紹介を行ったり、大規模な長屋には若い起業家たちに呼びかけて、複合ショップが立ち上がるなど多彩な事業が進捗している。からほり倶楽部というNPOの代表は、40代の若い建築家。彼を中心に、不動産や住宅、店舗にかかわる専門家が参画し、これまでの住民組織とは明らかに違う、新しい「ま

ち」の担い手となりつつある。まちづくりに市民の専門性や提案力が活かされた好例といえるだろう。そして、そのプロセスにおいて、立場や世代、価値観の異なる、しかしまちへの思いを共有した、新旧の住民による「学び」があったことを見逃してはならない。

まちづくりの担い手を、行政や専門家に頼ってきた時代は終わった。大規模な開発ではなく、地域の身近な文化や景観、環境などを契機に、まちづくりにかかわる、新しい担い手が登場しつつある。それは自分たちのまちを、旧来の権益や政治の力学ではなく、「市民知」で見つめなおした、地域のグローバル化ともいえる。「学び」を通して、地域を再発見・再評価しながら、そこを舞台に人間の自発的な関係性を結び直す。豊富な情報を持ち、専門性と提案力のあるNPOが活躍することで、地域の自己決定も促進されてゆくことだろう。

「市民知」は、知的で能動的で開放的な交流をくりかえし重ねながら、まち

の責任主体としての存在を形成してゆくのである。

■芸術で人材を育てる

「市民知」を生み出した、「学び」の実例をひとつ紹介したい。

市民の「学び」には異質の出会いが不可欠であるが、應典院では、芸術文化を用いた人づくり、まちづくりの実践を試みている。

芸術は、日本ではごく限られたファンのためのものと考えられてきたが、本来芸術の可能性とは、劇場や美術館だけに納まるものではない。芸術は、創造力や批判力、あるいは他者との交流や共感する力を育む高い潜在力を持っており、市民の主體的な「学び」を引き出す魅力的なインセンティブともいえる。應典院ではしばしば芸術のワークショップを催すが、そこでは世代や立場、価値観の違いなど異質なものが出会い、対話を重ねながら、共通のつなが

りを見出ししていく。出来上がった作品価値よりも、そのプロセスから生まれる関係性や場を「学んで」ゆくののである。

應典院で2003年11月より04年3月まで開催の長期セミナー「OSAKAアート・コミュニティ・プロジェクト」も、芸術による地域創造を目的として



▲アートとまちづくりを語り合う

いるが、最終的にはその受講者の中からNPOやコミュニティビジネスといった、新しい地域の担い手を育成することを目標としている。全体を3期に分けて、1期ではプロの芸術家によるワークショップ体験などがあり、2期では、芸術をテーマに働く人々を現場に訪ね、3期目に少人数の合宿やセミナーを通して「芸術と仕事」について徹底的に議論しあう。創造的な感性を教育や福祉に活かすことも可能だろう。あるいは、センスを活かして、カフェや雑貨店などを起業することも考えられる。ここでは、芸術とは、展示や上演される作品ではなく、これからの地域を市民の視線からとらえなおし、そこで仕事を創造しながら生きていることの価値としてとらえられている。

むしろ、異質性との出会いは、地域の中だけにとどまらない。文化行政の視点から、まちをとらえようと、ハコモノ以上に不足しているものがたくさん見えてくるはずだ。また、まちに開かれた大



▲上町台地アートツーリズム

創造的に楽しむことを欲求しはじめたのではないか。その意味からも、数値だけでは見えない「人と人のかかわり」や「まちの多様性」こそ、これからの地域の魅力の源泉となるものだろう。芸術によるまちづくりは、その地域固有のすぐれた人材を育てる、播種者の役割を担っているのである。

■上町台地からまちを考える会

應典院はひとつの拠点だが、これを面に展開しようとする隣のまちづくりと協働した、地域全体をつないだNPO「上町台地からまちを考える会」(以後考える会と略)の活動が立ち上がった(03年5月発会)。

上町台地はまた都心の居住エリアとして知られるが、同時に文化的な資源と人材に恵まれた地域でもある。大阪の中心部でありながら、四天王寺や大坂城といった歴史資源、また学校や病院、文化施設などの生活拠点が集積

しており、キタやミナミにはない、もうひとつの都心の魅力として人気が高い。考える会は、この上町台地周辺の3つの地域NPO、すなわち、350年の歴史を保つ寺町地区の應典院、前述した空堀地区のからほり倶楽部、そして在日のまちとして知られるコリアタウンのコリアNGOセンターを中心にネットワークされた、まちづくりプラットフォームである。自転車圏内に3つの個性の異なるまちがあり、それぞれ自立したNPOが拠点化されており、住民組織とも連携しながら、同心円的に活動領域を拡張していく。固有性に富んだ3つの地域がつながることで生み出されるメリットは小さくない。

中でも、考える会がもつとも力を入れているのが、上町台地全体に「学び」の共同体を作り上げることである。「世代間交流」「共生」「新旧融合」などをキーワードとしながら、枠組みも、講師も、場も趣向を凝らし、地域資源とその資

学が、文化経済や公共政策といった研究を通して、民学協働のフィールドを作り上げていくことも可能だろう。

これまで地域の発展は、成長志向の物差しで測られてきた。しかし、成長至上主義には限界がある。スローライフの時代、人々は自分の生活をより深く

源を有する人々とのつながりを形にしていこう。すでに、本誌紹介の「てらまち極楽ストーリー」の他、「コリアタウン異文化体験会」や「上町台地音風景図鑑・冬のキャンペーン」などを実施している。

都心の恵まれた居住地区として、上町台地の人気は根強いが、現状のようなマンション開発が今後も続けば、逆に周辺コミュニティの質は低下してゆくことになる。利便性や機能性だけが都心居住の価値ではないはずであって、逆に言えば、今こそ上町台地で生活する意味、住みごたえや暮らしがいを地域全体で創出していくことが肝要なのではないか。そしてそこに住む一人一人が、居住を通して、自分たちの生活や生き方を、あるいは子どもたち次世代の幸福を考えるだいな契機として作り出してゆく。ここでも住み手たちが「学び」ながら編み出す「市民知」が、きわめて重視されているのである。

■コミュニティ・エンパワーメントの時代

いま日本中の都市が、未曾有の少子高齢化社会を迎えつつあるが、同時に地域が高齢者や子どもの持つ「弱さ」と本気で向き合わなくてはならない時代でもある。「弱さ」とはけっして無力なものではなく、そこを起点にしながら、まちと暮らしを考え直すことで、コミュニティにいま何が欠いているのか、ということを解き明かす契機ともなる。言い換えれば、我々は「弱さ」から何を学び、何を創造することができるのか、これまでの経済活性化、景気回復一辺倒のまちづくりとは異なる、やわらかな視座が求められている。

またまちには、本来潜在する力がある。まだ掘り起こすことができる、という可能性からまちの資源力といってもいいだろう。その資源力は、かたちのあるものだけとは限らない。まちへの愛着や誇り、信頼など長年時間をかけて

育んできた人と人の関係性も、地域固有の立派な資源といえる。他の何物にも代え難い、ソーシャル・キャピタル(社会の関係資本)がそれだ。

これからの都市計画は、従前のハードの計画本位ではなく、「市民知」による都市の創造にこそ、視座を転換すべきだろう。「弱さ」を自覚的にとらえ、助け合う互恵的な人的ネットワークを基盤として、そこにNPO、コミュニティビジネスなどを統合した、新たな社会システムがこれからの都市のOSとなっていく。また、「市民知」は、地域に開かれた大学の参画も得て、いっそうの民学協働が推し進められるに違いない。都市はどの専門家のものでもなく、市民のものである。コミュニティ・エンパワーメントの時代は目前に迫っている。

本論は、日本都市計画学会「都市計画」2004年2月号より転載しました。



秋田光彦主幹から……

こころのあし

呼吸するお寺・應典院の、9月～12月の活動記録です。
関連のエンディング事業なども併せて報告します。

9月

- ◇1日……アサヒファミリィ新聞「エンディングサポート」(以下EIS)の取材。
- ◇7日……台風襲来、終日強風。各地の被害甚大。
- ◇8日……日本最大級のシニアNPOのナルクを訪問。高畑敬一会長と面談、EISネットワークの参加を承諾したたく。
- ◇9日……弟子の池野亮光が浄土宗僧侶養成コースである少僧都養成講座を無事満行。
- ◇11日……cooroomにて、上田假奈

代さん、内橋和久さんと「コトボロ」セッション。あなたとわたしの間に出演、詩とギターと声明による不思議な空間が。

◇16日……大阪府立老人センターでシニアボランティアについて講演。その後、大阪府が立ち上げた大阪ブランドコミッティー会議に委員として出席。委員長は安藤忠雄さん。夜はいのちと出会う会。青少年育成審議会理事長吉村憂希さん。

◇19日……應典院にて佐藤梅崎家の結婚式。導師を務める。新婚

11月

- ◇21日……いのちと出会う会。TAV交通死被害者の会事務局長長村幸純さん。
- ◇25日……寺町倶楽部運営委員会。
- ◇27日……大阪商工会議所の「まちのこぎわいじへり」学習会で「ユニティビジネス」について講演。
- ◇28日……新潮社「考える人」の取材。特集は「考える仏教」だが、一心寺や坊主バーを案内する。29日まで続く。
- ◇28日……スタッフ交流会で大阪市大病院小児病棟のアートプロジェクトを訪ねる。医療と芸術の親水領域は、全国でも類を見ない。
- ◇30日……應典院の協力事業として、医療とアートを考える「療育環境フォーラム」を開催。多士済々のゲストが登場。私は宗教とアートについて意見を述べる。
- ◇31日……檀家さんと秋の団参バスター。京都鞍馬寺と貴船を巡る。少し紅葉には早いですが忙中閑

◇6日……下寺町の魅力を探訪する。てらまち極楽ストーリー(以下

てら極楽第一話は、心光寺で「寺町いにしえ編」極楽ものしり学入門」。講師は住職の山名雄光さん。

◇11日……新築なった精華小劇場で燐光群のリーディング。ときはなたれて」を鑑賞。体育館を改装しただけの空間だが、喧騒の渦の中に咲いた静謐な園が心地よい。

◇12日……京都の東映太秦撮影所で、私が20年前に書いた原作の映画化「カーテンコール」佐々部清監督)の完成試写会。少年時代の風景が甦り、涙してしまった。良心作。

◇13日……てら極楽2話、一心寺三千仏堂で「寺町・現代編」極楽のまちづくり」。高名な建築家でもある長老の高口恭行さんの講演。周辺の高口建築を見学するツアーも好評。

◇14日……應典院恒例の子ども七

は馴染みの劇団「劇創ト社」のメンバー。厳かな仏前結婚式のあとは、劇団挙げての演劇披露宴!

◇23日……大蓮寺の秋彼岸法要。続いて自然・共命の合同供養会。

◇27日……エンディング情報交流会。NPOスタッフやジャーナリストなど識者14名による活発な議論。ゲストはライフデザイン研究所の小谷みどり主任研究員を招く。

◇28日……朝日新聞取材。應典院の社会活動のこれからを語る。

10月

◇2日……ささえあい医療人権センターCOM「患者塾」にて日本人の死生観の変化について講演を述べる。

◇3日……韓国の法輪和尚の講演

五三法要。24名の子どもの参加があり、その家族で本堂は満杯。

◇19日……てら極楽3話は、大覚寺を会場に「声と音のアート」。若手僧侶による仏教音楽の夕べ。ゲストは詩人の上田假奈代さん。江戸時代創建の荘厳な堂内は、若者で満杯!

◇23日……てら極楽4話は、應典院で寺町・まち暮らし編「極楽タウン」わたしたちの寺町について語る。多士済々のゲストによる。寺町へのオマージュ。

◇29日……学芸出版「まちづくり」の取材。

◇30日……應典院全スタッフで1年間のふりかえり会議。

12月

◇4日……弟子の池野亮光が浄土宗の伝宗伝戒道場に入行。総本山知恩院で3週間の念仏三昧。

◇7日……大阪経済大学の長田寛康教授より新年度の「演劇とア

会に参加(主催アーユス・コリアNGOセンター他)。世界でも先駆的なNGO型寺院の実践に刺激を受ける。

◇7日……大阪府立現代美術センターから芸術学習拠点についてヒアリングを受ける。ハコ以上にマネシメントが生命線だと述べらる。

◇9日……石川県七尾まちづくりセンターで、「お寺のチカラ」の講演はじめての能登半島の小旅行。和倉温泉に泊めていたたく。

◇13日……上町台地からまちを考える会と共催の「てらまち極楽ストーリー」の記者発表。

◇19日……真言宗豊山派教化研究所一行の見学と講演。夜は大阪府のカレイドスコープの説明会に参加。

トマナツメント「演習」について相談を受ける。

◇10日……朝日新聞より中高年とお墓について取材を受ける。

◇20日……寺町倶楽部の運営委員会と忘年会。参加は4名とさびしかったが。

◇24日……サリュ座談会の取材。アートと子どもについて。

◇25日……池野亮光、伝宗伝戒道場を晴れて成満。満行式では、146名の行僧を代表して謝辞を述べた。立派な浄土宗僧侶となる。師匠の責任を痛感する。

◇26日……應典院の自分感謝祭。午後の部28名、夜の部28名の参加。一年の終わりを感ずる。年忘れ交流会には20人以上が参加して盛況。

◇31日……大蓮寺除夜の鐘。200人以上の人出でにぎわう。正午から本堂で修正会のお勤め。新年明けましておめでとう。

應典院寺町倶楽部
主催・共催の催し
ラインナップ

いのちと出会う会

いま満ち足りた時代だけれど、なぜだろう。悲しみが見えにくい。生きる力がわきあがらない。いつか来る「人生の店じまい」を見据え、生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合いたい。そんな集いが「いのちと出会う会」です。
※いずれも第3木曜日18:30～21:00まで

第48回 3月17日(木)
「マザーテレサと出会う会」
話題提供者: 是枝律子さん
(サンチの会代表)

第49回 4月21日(木)
「命といのちを見つめて」
話題提供者: 坂下裕子さん
(病児遺族わかちあいの会小さないのち代表)

★お問合せ・ご予約は……

應典院寺町倶楽部
FAX06-6770-3147
メール info@outenin.com

第43回寺子屋トーク
「生老病死しょうらびょうしのコミュニティケア
—いのちを支えるビハーラを考える—

「ビハーラ」とはインドの古い言葉で「休養の場、僧院」を指します。今、「仏教者による社会実践」が仏教精神に基づく「ビハーラ活動」として広がりを見せようとしています。年間100万人を超える人が亡くなる多死社会、ビハーラ活動は地域の生老病死に寄り添うコミュニティケアになりえるのか。仏教者と今を生きるすべての人々への関心喚起と実践への糸口をはかります。

○開催日
5月14日(土) 14:00～

○プログラム
第1部 発題
「いのち・地域・仏教」
高橋卓志さん
(臨済宗・神宮寺住職)

第2部 シンポジウム
「コミュニティケアとしての
ビハーラを考える」

パネリスト
南 吉一さん
(医師/在宅ホスピスおおぞら所長)
米沢なな子さん
(高齢者住宅情報センター大阪 相談室長)
高橋俊市さん
(医業経営コンサルタント)
清 史彦さん
(真宗大谷派・瑞興寺住職)
コーディネーター
田中いずみ
(大蓮寺・エンディングを考える市民の会事務局長)

○会場
應典院本堂ホール

○参加費
一般 1500円 会員・学生 1000円

詳細は、事務局までお問い合わせください。

應典院寺町倶楽部の
ニュースレター

サリュ
Vol.44

編集後記

大阪の象徴(?)、通天閣の展望台からは天王寺公園と大阪市内の数少ない日本庭園のひとつである慶沢園を南端にして北に伸びる下寺町のグリーンベルトを眺めることができる。この景観を目にすれば、「大阪は緑の少ない地域」という先入観を持つ人は、きっと驚くことだろう。

たとえ通天閣に上らずとも、應典院の2階ロビーから、その一端である見事な屋縁が眺望できる。豊かに生い立つ木々にシジュウカラなどの野鳥が集い、時に木の実を啄ばむ光景を目にすることも珍しくない。初めて訪問した日、「都会にこんな隠された静かな場所があるなんて」と大阪の魅力の一つを発見してうれしかったことを思い出した。

下寺町を初めて訪れた「てらまち極楽ストーリー」参加者からもその魅力に触れ、このまちを再訪したいとの声を数多く聞いた。そこに住まう僧侶に接したことから引き出された関心が、その声を生み出したのだろう。特異な町並みは風景としてではなく、実態を伴い息づいたのだ。

この下寺町を加藤政洋さんは「無数の他者(=死者)の痕跡で埋め尽くされた死者とともにある街」と名づけ、コミュニティのあり方を模索するヒントを与えてくれる場所だと説いた。たとえ他者と同じ位置に立つことはできなくても、思いを寄せることはできると。

確かに、個々に異なる利害と価値観をもった他者が住まうまちのコミュニティ再生は、住民が「ディスコミュニケーションな他者にも思いを寄せよう」という意志を持つかどうかにかかっている。その時に、伊田広行さんの提唱するスピリチュアルシングル主義的な感覚は、重要な鍵になるはずだ。つまり、他者の利害の中に埋没したり孤立するのではなく、いろんな違いのある人との共存、協働を目指し、人と自然環境などのつながりのなかで生かされている感覚をもつことも忘れてはいけない。

季節は春、まち散策に絶好の日和。いつもと違う通りを歩いたり、いつもと違う視点でまちを眺めてみてはいかがだろうか。

(大塚郁子)

■発行日
2005年3月10日
■編集人
秋田光彦
■スタッフ
池野亮光、柳澤尚樹、大塚郁子
■発行所
應典院寺町倶楽部
〒543-0076
大阪市天王寺区下寺町1-1-27
TEL 06-6771-7641
FAX 06-6770-3147